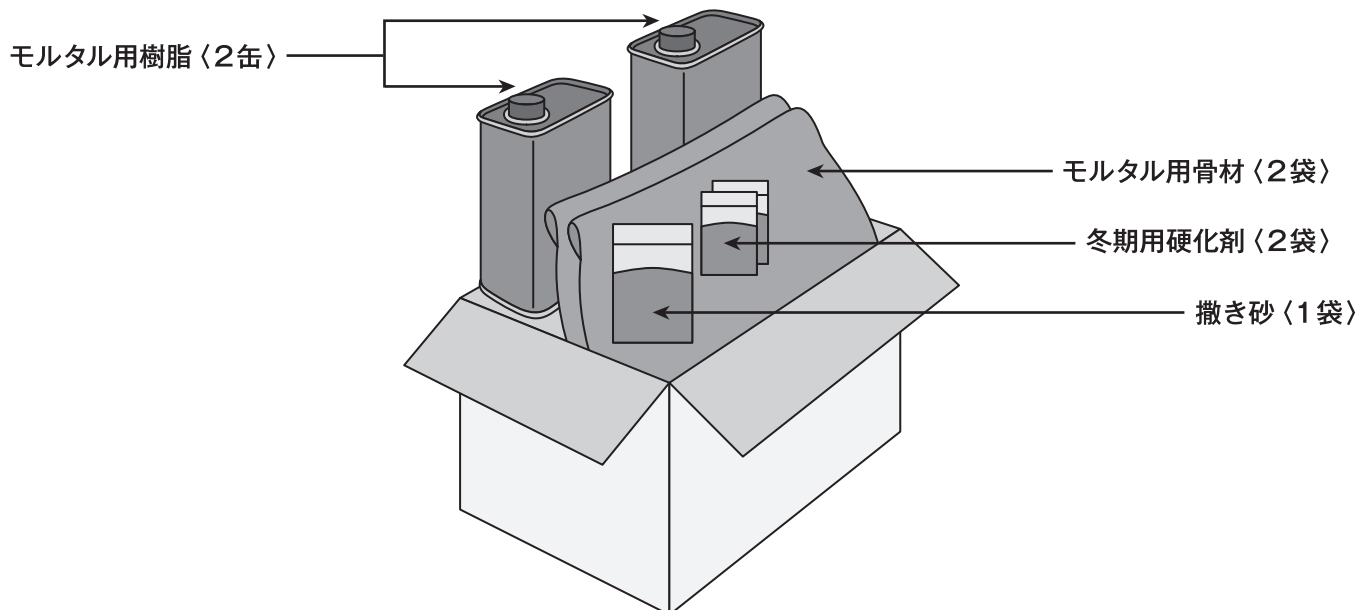


「REDCOAT RG キット typeA」取扱説明書

ご使用の前に、必ずこの「取り扱い説明書」をお読みください。

1. 梱包内容

「REDCOAT RG キット typeA」の梱包内容は下図及び下表のとおりです。



名 称	容 量	数 量	適 用
モルタル用樹脂	1.65kg / 缶	2 缶	骨材と混ぜて樹脂モルタルを作ります。
モルタル用骨材	8.35kg / 袋	2 袋	モルタル用樹脂と混ぜて樹脂モルタルを作ります。
撒き砂	800g / 袋	1 袋	滑り止めのため、硬化前の樹脂モルタル表面に散布します。
冬期用硬化剤	66g / 袋	2 袋	低温時にモルタル用樹脂液、或いはモルタル用骨材に添加して使用します。

2. 施工温度の範囲

施工可能な温度範囲は、下地温度 0℃～ 35℃です。

3. 下地種類

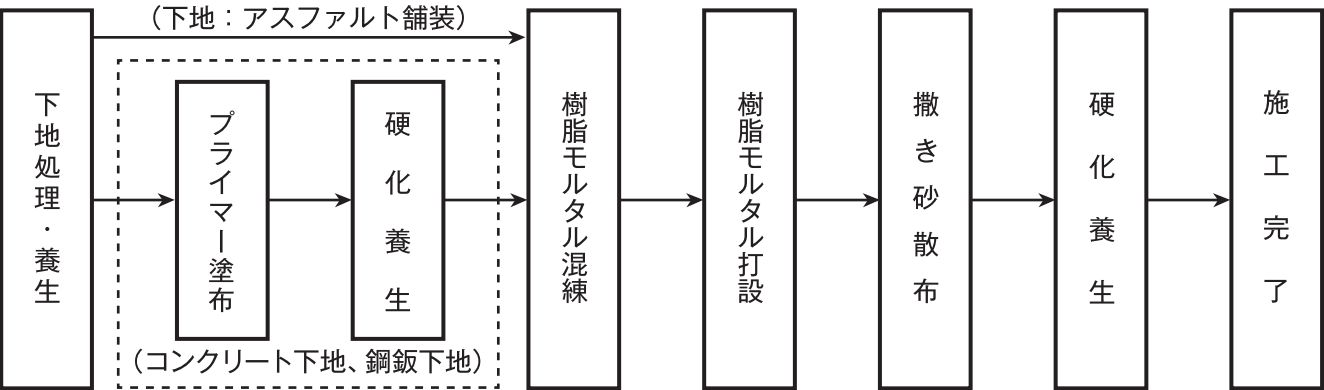
3-1 施工可能な下地

下 地 種 類	備 考
アスファルト舗装	プライマーなしで施工します。
コンクリート舗装、コンクリート床版	別売りのキットプライマーの塗布が必要です。
鋼板	別売りのキットプライマーの塗布が必要です。

3-2 施工できない下地

下 地 種 類	備 考
ポリマーセメント系	エチレン酢ビ系、アクリル系、SBR系等
エポキシ樹脂系、ウレタン樹脂系	塗膜、樹脂モルタル
アスファルト系	乳剤、防水材、常温合材、パッチング材
カチオン系	カチオンシーラー等
塗料	各種塗料、ロードマーキング

4. 施工フロー



5. 施工方法及び注意点

5-1 下地処理・養生

下地処理・養生	施工方法	下地処理は、堅固で清浄な下地の形成を目的として行います。 1. 下地の脆弱部や旧補修材等はハツリ取るなどして完全に除去します。 また、コンクリート下地や鋼鉄下地の場合は、ディスクサンダー等で表面を研掃し、脆弱部（レイタンス等）や錆・黒皮等を全て除去します。 2. 下地面に油脂分・水分がある場合は完全に除去します。 水分はウエス等で拭った後、自然乾燥するか、ブロアー、ガスバーナー等で強制乾燥させます。 3. 集塵機等でゴミや埃を除去し、下地表面をきれいに清掃します。 4. 補修部分周辺をガムテープ等で養生します。
	注意点	・ 下地処理が不十分だと剥離や未硬化の原因となります。 ・ 油脂分や水分が存在すると、剥離や未硬化の原因となります。 ・ ガスバーナー使用時は下地を傷めないように十分注意します。 ・ ガスバーナー使用の際は、近くに材料を置くことや、近くでの樹脂取り扱い作業（調合、塗布、打設等）は行わないで下さい。 ・ ゴミや埃が存在しても未硬化や剥離の原因となる場合がありますので除去して下さい。 ・ 養生をきちんとしないと、補修部分以外を汚したり、補修部分周辺の美観が悪くなります。

5-2 プライマー調合（下地がコンクリート、鋼鉄の場合のみ）

プライマー調合（コンクリート下地・鋼鉄下地の場合）	施工方法	1. コンクリートや鋼鉄等の下地に施工する場合は、別売りのキット用プライマーを使用します。 2. 下地温度を測定し、0℃～35℃の範囲であることを確認します。 3. プライマー用樹脂とプライマー用硬化剤を準備します。 4. プライマー用樹脂缶を1分程度よく振り、缶内の樹脂液を均一にします。 5. 注意しながらプライマー用樹脂缶の蓋を開けた後、プライマー用硬化剤を全量缶内に投入します。 6. 缶の蓋をしっかりと閉じた後、プライマー用硬化剤が溶解するまで缶をよく振ります（温度により、硬化剤の溶解時間が異なります）。
	注意点	・ 下地温度が0℃未満の場合は、別売りの硬化促進剤を使用して下さい。また、35℃を超える場合は、使用をお控え下さい。 ・ 硬化剤を添加する前にプライマー用樹脂缶をよく振って均一にして下さい。不十分な場合には、未硬化等の原因となることがあります。 ・ プライマー硬化剤が溶解しない状態で使用すると、未硬化や剥離等の原因になります。 ・ プライマー用樹脂缶を振った後に、蓋を開ける際には、内圧が上がりが内容物が噴き出すことがありますので、注意して開けて下さい。

5-3 プライマー塗布（下地がコンクリート、鋼鉄の場合のみ）

プライマー塗布（コンクリート下地・鋼鉄下地の場合）	施工方法	※コンクリートや鋼鉄当の下地に施工する場合は、別売りのキット用プライマーが必要です。 1. プライマーをモルタル打設箇所に刷毛やローラー等で均一に膜が形成するように素早く塗布します。 標準塗布量はコンクリート下地の場合 300 g / m²、鋼鉄下地の場合 200 g / m²です。 2. 塗布完了後、硬化養生し、プライマーの硬化を確認してから、次工程へ移行します。
	注意点	・ プライマーの塗布量が少ないと、未硬化や剥離等の原因となります。 ・ 下地に凹凸がある場合は、プライマーの塗布量が 400g / m²以上となる場合があります。 ・ 塗布したプライマーの吸い込みが多いコンクリート下地では、未硬化が生じることがあります。未硬化部を取り除いた後、再度プライマーを上面に塗布します。 ・ プライマーが硬化する前に樹脂モルタルを上塗りすると、未硬化や剥離等の原因となります。 ・ シンナー、溶剤等や水等が混入すると、未硬化や剥離の原因となります。 ・ 塗布面積の小さい箇所が数か所に点在する場合には、塗布に時間を要するため途中でプライマーが硬化し予定の面積を塗布できない場合があります。 ・ ゲル化寸前（粘度が高くなった状態）或いはゲル化したプライマーを使用すると、未硬化や剥離等の原因となります。

5-4 樹脂モルタル混練

樹脂モルタル混練	施工方法	この作業は下地処理完了後、或いはプライマー使用時はプライマー塗布・硬化完了後に行います。 1. 水分や油脂分がないことを確認し、ゴミや埃がないように清掃します。 2. 下地温度を測定し、0℃～ 35℃の範囲であることを確認します。 3. モルタル用樹脂、モルタル用骨材、撒き砂を準備します。低温時（0℃～ 10℃）は冬期用硬化剤も準備します。 4. モルタル用樹脂缶は 1 分程度よく振り缶内の樹脂液を均一にします。 5. モルタル用骨材は袋の上面をハサミ等で開封し、内容物が出ないように注意しながら空練し、骨材を均一にするとともに、骨材塊がないようにほぐします。 6. モルタル用骨材 1 袋にモルタル用樹脂液 1 缶を全量投入した後、内容物が出ないようにしっかりと骨材袋を掴みながら、樹脂と骨材を揉みほぐすようによく混合し、均一な樹脂モルタルとします。 たまに、袋の中を覗き骨材の塊等がないか混合具合を確認します。 ※下地温度が 10℃以下の場合は、冬期用硬化剤を①或いは②のように添加し使用します。 ① 均一にしたモルタル用樹脂の缶内（1 缶）に冬期用硬化剤（1 袋）を添加した後、硬化剤が溶解するまで缶をよく振り、上記のように樹脂モルタルを混練します。 ② 冬期用硬化剤（1 袋）をモルタル用骨材（1 袋）に添加した後、空練をして均一にします。その後モルタル用樹脂液（1 缶）を骨材に投入し、上記のように樹脂モルタルを混練します。 7. 大量に使用する場合などでは、電動ハンドミキサー、練りバケツを使用し攪拌することも可能です。 ① その場合は、練りバケツにモルタル用樹脂を入れ、攪拌しながら骨材を投入して下さい。 ② 冬期用硬化剤は、骨材を投入する前に、樹脂液に混合して下さい。
	注意点	・ 水分、油脂分、ゴミ、埃等がある場合は未硬化や剥離の原因となります。 ・ 下地温度が 0℃未満の場合は、別売りの硬化促進剤を使用して下さい。また、35℃を超える場合は、使用をお控え下さい。 ・ モルタル用樹脂缶は、骨材への添加する前によく振って均一にして下さい。不十分な場合には、未硬化等の原因となる場合があります。 ・ 樹脂と骨材の混練が不十分な状態で使用すると、未硬化や剥離等の原因になります。 ・ 袋の端部は樹脂と骨材が混ざり難いため、均一に混練できているが確認します。 ・ 電動ハンドミキサー及び練りバケツは乾燥した清浄なものを使用します。他の材質の付着は、硬化不良や、異物混入の原因となります。 ・ 攪拌で使用した道工具は、洗浄溶剤（アセトンやラッカーシンナー等）で洗浄し乾燥させます。 ・ モルタル用樹脂缶を振った後に蓋を開ける場合には、内圧が上がり内容物が噴き出す場合がありますので、注意して開けて下さい。

5-5 樹脂モルタル打設

樹脂モルタル打設	施工方法	この作業は、樹脂モルタル混練後に行います。 1. 袋の中を覗き、十分混合ができていることを確認します。 2. 得られた樹脂モルタルを補修箇所打設し、コテ等で下地に樹脂モルタルが十分にいきわたるようにコテ圧をかけ素早く敷均します。30mm より厚くしたい場合は、2 回以上に分けて施工します。2 回以上に分けて施工する場合は、樹脂モルタルが硬化したのを確認してから、樹脂モルタルを塗り重ねします。塗り重ねる前に、表面に油脂分、水分、ゴミ、埃がないことを確認します。 3. 樹脂モルタルを敷均した箇所から、直ちに（硬化する前に）撒き砂を表面に散布します。 4. 撒き砂散布後、硬化養生をし、樹脂モルタルの硬化を確認したら完成です。（硬化は、指で押してへこまなくなった時点が目安です）※表面にタック（若干のべとつき）が残ることがあります。 5. 使用したコテ等はシンナーやアセトン等で洗浄します。 6. 周囲にテープ養生した場合、撒き砂散布が終わった箇所から、テープを剥がします。
	注意点	・ 樹脂モルタルの塗布厚が薄すぎると、未硬化や剥離等の原因となります。 ・ 下地に凹凸がある場合は、凹部に樹脂モルタルが充填されるように塗布します。充填が不十分だと剥離の原因になります。 ・ プライマーを使用する場合、プライマーが未硬化の状態では樹脂モルタルを塗布すると、未硬化や剥離等の原因となります。必ずプライマーが硬化したのを確認してから塗布します。 ・ シンナー等の溶剤や水等が混入すると、未硬化や剥離の原因だけでなく、目的とする物性も得られません。 ・ 小さい塗布面積が、数か所に点在する場合には、途中で樹脂モルタルが硬化する場合があります。 ・ ゲル化寸前（粘度が高くなった状態）或いはゲル化した樹脂モルタルを使用すると、接着不良や仕上がり不良になります。 ・ ゲル化寸前（粘度が高くなった状態）或いはゲル化した樹脂モルタルの表面に撒き砂を撒いた場合は、撒き砂が十分に付着せず滑り止めの効果が得られません。 ・ 硬化体でもシンナーや溶剤等で脆弱になるため、接触しないようにして下さい。 ・ 一度に 30mm を超えて打設すると、物性が低下する可能性があります。一回の打設厚は 30mm 以下にします。 ・ 塗り重ねをする際、表面に油脂分、水分、ゴミ、埃があると剥離の原因となりますので、必ず取り除きます。 ・ 周囲にテープ養生した場合、樹脂モルタルが完全硬化してから剥がすのは、非常に剥がしにくくなります。 ・ 塗り重ねする場合は、当日中に行います。塗り重ねが翌日以降となる際は、水分、油脂分、ゴミ、埃がないことを確認、清掃した後、プライマーの工程から再度実施します。

5-6 硬化養生

硬化養生	施工方法	1. 撒き砂を散布し、養生テープを剥がしたら、静置し硬化養生をします。 2. 硬化確認は、混練時に袋に付着している樹脂モルタル等でまず確認し、固まっているようなら、施工箇所を直接触るなどして確認して下さい。
	注意点	樹脂モルタルは、混練後徐々に粘度が高くなり、最終的に固化します。敷均し後は表面に触れたりすると未硬化が生じたり、硬化後に傷として残ることがあります。誤って靴跡などをつけないように注意して下さい。

6. 夏期、冬期の施工について

6-1 夏期の施工の場合

夏期施工	施工方法	1. 下地温度が 35℃を超える場合には、硬化不良等が生じる可能性があるため使用を避けます。 2. 気温が高い時は硬化が早く進行します。 3. 一度に取り扱う量を少なくすることで、途中で硬化してしまう等のロスを少なくできます。 4. 材料を小分けにする場合は、樹脂液は缶を振り、骨材はよく揉みほぐし均一にしてから、配合比率を確保して行って下さい。 5. 材料は日なたに放置せず、使用直前まで日陰で保管します。
	注意点	・樹脂や骨材を小分けするとき、不均一な状態のもので実施すると得られる（プライマーや）樹脂モルタルが未硬化や性能がでなかったりします。 ・硬化が早く進行するため、標準使用量で配合しても使用途中で硬化することがあります。 ・小さい塗布面積が、点在する場合には、途中で樹脂モルタルが硬化する場合がありますので、特に注意して下さい。 ・温度が高いと樹脂液缶の内圧が高くなり、内容物が噴き出す場合がありますので、蓋を開ける際には十分に気をつけて下さい。また、缶を振った後も同様のことが生じる可能性がありますので、注意して下さい。

6-2 冬期の施工の場合

冬期施工	施工方法	【プライマー】※コンクリートや鋼鉄等の下地に施工する場合は、別売りのキット用プライマーが必要です。 プライマーには冬期用硬化剤は同梱されておりません。 下地温度が 0℃未満で施工する場合は、別売りの硬化促進剤を使用して下さい。 【樹脂モルタル】 下地温度が 0℃～ 10℃の場合は、冬期用硬化剤を①或いは②のように添加し使用します。 ① 均一にしたモルタル用樹脂の缶内（1 缶）に冬期用硬化剤（1 袋）を添加した後、硬化剤が溶解するまで缶をよく振り、上記のように樹脂モルタルを混練します。 ② 冬期用硬化剤（1 袋）をモルタル用骨材（1 袋）に添加した後、空練をして均一にします。その後モルタル用樹脂液（1 缶）を骨材に投入し、上記のように樹脂モルタルを混練します。下地温度が 0℃未満の場合は、プライマー同様別売りの硬化促進剤を使用して下さい。
	注意点	【プライマー】 下地温度が 0℃未満では、使用しないで下さい。未硬化が生じます。 【樹脂モルタル】 下地温度が 0 ～ 10℃の場合に、冬期用硬化剤を添加しないと、未硬化が生じます。また、硬化しても剥離が生じる場合があります。

【注意事項】

■ 火気について

- ・モルタル用樹脂は、消防法に定める危険物第四類第一石油類（引火点 21℃未満）に属する引火性液体です。取り扱い時（保管を含む）には、タバコ・ライター等の火気には十分注意を払うとともに、熱や直射日光を避けて保存して下さい。
- ・保管場所、施工場所には常に消火器を用意しておいて下さい。
- ・別売りのキット用プライマー、硬化促進剤も消防法に定める危険物第四類第一石油類（引火点 21℃未満）に属する引火性液体です。モルタル用樹脂と同様に保管・取り扱い下さい。
- ・硬化剤（冬期用硬化剤及びプライマー用硬化剤）も火気厳禁です。

■ 樹脂液について

- ・モルタル用樹脂（混練後の樹脂モルタル、プライマー樹脂を含む）に接触すると皮膚炎を起こすことがあります。必ず保護手袋を着用し、接触しないようにして下さい。また、眼刺激性がありますので、必ず保護メガネを着用し眼を保護して下さい。
- ・皮膚に付いたときは、布などで拭き取ってから石鹸水でよく洗って下さい。
- ・揮発分に有害な毒性はありませんが、換気をよくし、極力吸入しないようにして下さい。必要により保護マスクを着用下さい。
- ・眼に入った場合は直ちに清浄な流水で 15 分以上洗浄し医師の診断を受けて下さい。
- ・飲み込んだ場合は、無理に吐き出さず、医師の診断を受けて下さい。
- ・詳しくは SDS をご覧下さい。

- ・樹脂液及び樹脂モルタルは硬化時に発熱を伴い高温となりますので、火傷に注意して下さい。
また、刺激臭の煙が生じる場合があります。そのような時は、硬化反応が終わるまで周囲に影響がない屋外等に放置し、煙を吸い込まないようにして下さい（第三者を含みます）。
- ・粘度調整や硬化時間の調整は行わないで下さい。また、同様の目的のためにシンナー等で薄めることは絶対にしないで下さい。
- ・水が混入しないように十分注意して下さい。

■ 骨材について

- ・硬化不良や接着不良となりますので、骨材は絶対に湿らさないように取り扱って下さい。
- ・骨材には硬化剤が予め添加されています。他の骨材では代用できません。また、他の骨材等を添加・投入することは、性能が確保できなくなるばかりでなく、硬化不良や接着不良を引き起こすため、絶対にしないで下さい。

■ 硬化剤について

- ・冬期用硬化剤（及びプライマー硬化剤）は、衝撃や摩擦が加わらないように取り扱って下さい。また、火気や高温発生のおそれにある場所では取り扱わないで下さい。
- ・保管や計量時に使用する容器の材質は、ステンレス／ガラス／ポリエチレン等を用い、鉄／銅合金／鉛／ゴム等は避けて下さい。

■ 工具などの洗浄について

- ・樹脂或いは樹脂モルタルが付着した道具類の洗浄は、市販のラッカーシンナー等を使用できます。硬化前であれば容易に洗浄できます。
また、コテ等に付着し硬化した樹脂モルタルは、シンナー等に一晩浸漬しておくとう容易に除去できます。
但し、洗浄した道具類を使用する場合は、よく乾燥させてから使用して下さい。樹脂や樹脂モルタルに混入すると、未硬化や剥離などの原因となります。

■ 保管について

- ・「REDCOAT RG キット typeA」は、直射日光や雨水等を避け、風通しのよい冷暗所に保管し、出荷後 6 ヶ月以内に使用して下さい。
また、保管場所には、火気厳禁とし、その表示を行って下さい。
- ・関係者以外の取り扱いができないように、保管して下さい。

「冬期用硬化剤」取扱説明書

1. 使用環境

下地温度が 0℃～10℃の場合に冬期用硬化剤を使用します。

2. 配合割合

配合は、「モルタル用樹脂 1 缶／モルタル用骨材 1 袋／冬期用硬化剤 1 袋」の割合です。

3. 使用方法

次の①又は②のいずれかの方法でご使用して下さい。

- ① よく振って均一にしたモルタル用樹脂 1 缶に冬期用硬化剤 1 袋を全量添加した後、蓋をして冬期用硬化剤が溶解するまで缶をよく振ります。その後、予め空練しておいたモルタル用骨材に樹脂液を全量投入し、樹脂液と骨材がよく混ざるように袋ごとよく揉み混ぜます。
- ② 空練したモルタル用骨材 1 袋に冬期用硬化剤 1 袋を添加し、冬期用硬化剤が分散するように再度空練します。その後、よく振って均一にしたモルタル用樹脂 1 缶を全量投入し、樹脂液と骨材がよく混ざるように袋ごとよく揉み混ぜます。

【注意事項】

- ・ 下地温度が 10℃以下の場合、冬期用硬化剤を添加しないと硬化しない場合があります。
- ・ 10℃以下（0～10℃）の場合は、必ず冬期用硬化剤を添加して下さい。
- ・ 気温が高い場合（目安として 20℃以上）に冬期用硬化剤を使用すると、硬化時間が早くなり作業時間が取れなくなることがありますので、注意して下さい。

2015 年 4 月版

RED COATINGS
レッドコーティングス株式会社

〒454-0921 愛知県名古屋市中川区中郷2丁目52番地
TEL 052-351-4666 FAX 052-351-4612 E-mail info@redcoat.jp